

成人向け
R18
ADULT ONLY

18歳未満閲覧禁止

天使の残骸



天使の残骸

目次

一 天使の残骸	……6
二 人魚館の河童	……34
三 半馬の散歩係	……48
四 便秘検査	……61

あとがき ……77

奥付 ……80

小説：灰屋ちゃん

表紙、口絵：くろがね囲炉裏

天使の残骸

一

もう疲れてしまいました。娘は難病で手足を失いました。お医者様に今のうちに思い出をたくさん作ってくださいね、と言われるような可哀想な子です。

ほんとうは、私があの子の望む場所に連れて行き、望むものを食べさせるべきなのは分かっています。けれども、私は娘を可愛らしく思えないのです。

可愛くないというのは容姿だとか振る舞いのことではありません。

むしろ娘は人形がそのまま生きているように美しく、人形のようにおとなしい、私には過ぎた子です。だから、私の子と思えないんです。

どこか遠いところからやってきた見知らぬ、他人としか思えない美しい人形の世話をさせられている。そういう考えが頭に浮かび上がってどうしようもない時があります。

私は高額な入院費のために、パートをいくつも掛け持ちしています。休日になったら重い体を起こして、病院に通う。娘に会うためです。

美しい白い人形が私の車の後部座席に座り、私のアパートを訪れ、私のスプーンから私

の作ったご飯を食べる。

娘を送り届けて、一人アパートに戻り、明かりを点けると浣腸の容器と差し込みトイレと新聞紙と白い羽根が散らかっている。

その瞬間に、私はどうしても娘ではなく何か美しい怪物を家にあげてしまった気がするのです。

誰かどうしようもない力で私からあの子を奪い去ってほしい。

二

メッセーシアプリに着信があった。出ようとしたところで着信は切れて走り去る車の音が聞こえる。僕は立ち上がって、パーカーを羽織り毛布を抱える。階段を降りて、一階のガレージに向かった。

車いすの上で天使が軒先から垂れる雨粒をじつと見つめている。薄手の水色のパジャマ姿の彼女は寒そうだ。毛布を彼女にかけ、彼女の隣にしゃがんで雨を眺める。雨が降り続いてこのところ肌寒くなっていた。彼女はちらつとこちらを見て、それから軒下に視線を戻した。

色が変わったコンクリート。目の前の坂道を通る原付。側溝の苔。

彼女は時折長く白いまつげをしばたかせながら外をじっと見ていた。

「こほこほっ」

彼女は咳き込んだ。白い羽が彼女の口元から飛び散った。なかなか咳は止まらない。白い羽が何枚もガレージのコンクリートの上に散乱していく。背中に手を伸ばすと、服の上から背骨の形が分かった。咳き込む度に、彼女の痩せぎすの体ではこのまま咳に耐えられずに、骨ごと碎けてしまふんじゃないかと不安になる。僕は背中を丸めた彼女の白い背骨を擦り続けた。

咳がやつと落ち着いて、口を小さく開けて深呼吸を繰り返す彼女を優しく抱きかかえる。柔らかい彼女の体と背骨が胸板にあたった。色の抜けた細い髪が鼻先に触れる。彼女の頭皮は無臭で雨の匂いしかなかった。

「中に入ろうか」

手も足もすでに羽根に還ってしまった彼女は悲しいほどに軽かった。彼女を抱えたまま転んでしまわないように慎重に階段を昇る。二階のリビングに入ってベッドに彼女を寝かせ暖房をつけた。

「紅茶飲む？ ジュースもあるけど」

「紅茶がいい」

お湯を沸かしてアールグレイをティーカップに注いでテーブルに置く。それから、ベッドに横たわった彼女を抱きかかえて、ソファに座って彼女を自分の膝の上に載せた。

ティースプーンで紅茶を掬って彼女の唇に触れさせる。彼女の唇がスプーンをはんで紅茶をすする。

「コップ持って」

彼女用の可愛い意匠のマグカップを持ち上げて口元に近づけると、彼女は小さな口でコップの中身で頬を膨らまして飲み下した。

「今日はどこに行きたいの？」

「北海道がいい」

ノートパソコンを起動して地図アプリを開く。

天使は画面の中で旅するのが好きだった。地図アプリを開いて非現実の旅行を楽しむのだ。人の形のアイコンを地図上に落とし、周りの風景を三百六十度映す。彼女と僕は映像の中、二人きりで旅をする。

道東の海辺にピンを落とすと、目の前に白い海が広がった。くると視点を回すと、遠くまで湿原が続いている。

「右向いて、まっすぐ」

天使が身を乗り出すからバランスを崩さないように抱きかかえる。折れそうなくらい細い首筋が鼻先で体温を放っている。

あとどれくらい彼女は僕と過ごせるのだろう。彼女が地図の上で旅行をするのは、あらゆる可能性を閉ざされていくことへの抵抗に見えた。

一時間あまり彼女は地図に夢中だった。僕にマウスを掴ませてあれこれ指示を出した。数歩歩かせ、目についた看板をもう一度確認しに何度も戻らせた。僕はそのわがままが甘えられているようにいつも嬉しかった。風車の続く道で一緒にすべての風車を数え、離島の岬を巡り、ピエロのハンバーガー店の前を通って、レンガ倉庫群を歩いた。

「お腹減った。さっき出てきたお店のハンバーガーたべたい」

函館のハンバーガー店を見ていたからだろうか、彼女はそう言った。あれは北海道でしか食べられないんだよ、と代わりにモスバーガーのデリバリーを頼んだ。届いたハンバーガーを見て、彼女はこれがハンバーガー、としきりに感心して前のめりになるので、彼女の胸を押さえないければならなかった。僕がハンバーガーを近づけると彼女は小さい口を開けて一口食べた。それから、ゆっくり時間をかけて咀嚼して、嚥下する。二、三口食べると彼女は満足したのか、次はポテトをせがむ。ポテトを一本差し出すと小動物のようにも

ぐもぐと食べ、四本を口に入れて、小食な彼女は満足した。僕はケチャップで汚れた彼女の口を拭って、床に落ちたピクルスを拾った。彼女が病院から持たせられた三種類の錠剤を二種類のパッケージを飲ませて、お湯を飲ませると彼女は満足そうに小さく息を吐いた。

「眠くなっちゃった？」

「ちよつと。眠っていい？」

「いいよ。いつものしてあげる」

彼女は僕に寄りかかる。僕は彼女をふわりと抱きしめて、赤子を寝かしつけるようにゆっくりと揺らす。

彼女には眠ることができる特有のリズムがあつて僕だけが熟知している。彼女の体をそのとおりにならふと揺らすと彼女はすぐに眠りに落ちる。

病院でいつも眠れないの、と彼女は時折言っていた。目の下に視線をやると目の下の薄い皮膚が不健康そうな紫色になっている。彼女の透き通るような皮膚の奥に白でない色があることに僕は少しドキドキした。

彼女は揺られながら、唇を僕の肩に押し付けていたが、やがて瞼を閉じ寝息を立て始めた。柔らかい頬と長いまつげが閉じられたのを確認した僕は、安心してきつたその眼の下のクマをなぞって、耳にかかった髪を撫でる。

僕の膝の上で天使が眠っている。幸福だった。

スマホの通知音で彼女の母親からメッセージが来ていることに気がついた。

「十八時に迎えに行きます。一回、小さいかけらが出せたただけだと聞いています。そちらの世話もいつも通りをお願いします」

膝上の彼女に手を伸ばし、パジャマをめくりあげると白いお腹はいつもどおり張っていた。手を伸ばすと、彼女の柔らかな皮膚の下にガスが感じられる。軽く叩くとぼんぼんと音が返ってきた。こっそり彼女のスカートをずり降ろすと紙オムツの端が見えた。

手足を失ってしまったから少女の便通は滞るようになった、と母親から聞いていた。

病院では一日中ベッドの上で、運動もできず、腸が動かない。オムツや差し込み便器にしか排便できない状況も悪さをしているのだろう。彼女が飲んでいる大量の薬の中には下剤も入っているはずだが、彼女は腹に溜め込んだまま週に一度の外出の日を迎えることが多かった。

人形のような白く冷たい肌を撫でる。指先の感覚から僕は便とガスでいっぱいになっている腸を想像して胸が高鳴る。僕は今日も、彼女の眠っている間の数時間をかけてお腹に溜まった便とガスを排泄させる。



へそ下に手を置く。それから、彼女の腹の右下からぐるりと反時計周りに腹をさする。彼女の弱い腹筋は大した抵抗もなく僕の指圧を受け入れていく。

肋骨の下も念入りにマッサージする。彼女の腸はガスが溜まりすぎて横隔膜を押し上げるくらい膨らんでいることもあったから、ガスが降りてくるように細い肋骨の下もなぞらなければならなかった。それから、下行結腸を撫でる。薄い皮膚の下にはゴツゴツとした感触がある。今回も彼女の大腸の中には水分を吸い尽くされた塊が収まっているのが分かって、こんなに毎回よく溜め込むものだ、と僕は苦笑した。

彼女に催させるのは容易ではない。起き上がれないせいで、彼女の腹筋は弱い。彼女の腸は胴体の中で右に左に振れ、教科書通りの位置にない。僕は彼女の腸管を丁寧丁寧に追って指圧をかけていく必要があった。

僕はマッサージを続けながら彼女の寝顔を覗き込んだ。彼女の母親のいうように、彼女は美しい人形のようなだった。白い滑らかな肌をした、球体関節の人形。病に冒され、肉体

を羽根に置き換えられながら、彼女はどんどん美しくなる。

彼女が生物である証拠はこの皮膚の内側にしかない。

神様に手足を奪われ肺を蝕まれ、そう遠くないうちに彼女は死を迎える。葬式に僕は参加できない。僕は彼女の親族でも、友人でもなく、参列すべきでない人間だ。

棺に収まった彼女は白い羽根に包まれて静かに目を閉じている。美しいその人形のような死体を僕は見ることができない。それがとても残念だった。

三

少女の白いまつ毛がびくりと動いた。二、三度僅かに瞬いた後、彼女は瞼を開いた。

僕の膝の上で天使はんうつ、と眠そうな声を漏らしてから、眠気まなこで画面を見つめた後、ちらりとこちらを伺う素振りを見せた。

「よく寝た？」

そう僕が聞くと、曖昧な返事をして画面に目を戻した。

「お茶、飲む？」

彼女は少し悩んだ後、僕のマグカップから少しだけ飲んで、喉渴いてない、とマグカッ

プを下げさせた。

「地図の続きを見ようか」

僕は彼女と非現実の旅行の続きをはじめたけれど、彼女は様子がおかしかった。あれほど、せわしく視点を変えさせていたのに、レンガ倉庫からの景色を眺めたまま動かない。

僕は眠ってる間に彼女にしたことを思い出す。僕は彼女の膨らんだお腹を撫でた。大腸を皮膚の上から指圧して、ガスと便を出口のほうへと押し進めた。数時間に渡るマッサージ。最後には彼女の小さなお腹はきゅるきゅると音を立てていたから、人形のような体にもすっかり効いているはずだ。彼女の直腸からS字結腸まで、降りてきた便と気泡がびっしり詰まっている。

彼女は唇をきゅつと結んで、息を吸った。

「そろそろ——」

「そうだ。函館山から夜景も見ようか？」

彼女が何か言いかけたのに僕は気づいていながら、彼女が言い出せないように言葉を被せる。

「ごめん、何か言った？」

「ううん」

彼女が言い出せないのは分かっていた。きっと彼女の性格なら限界まで我慢する。マウスに手を伸ばすふりをしながら細い首筋に汗が浮いているのが視界に入った。

函館山にフォーカスして展望台の景色をわざと時間をかけながらぐるりと巡る。

ぐおおおつ。

僕の膝の上から音が聞こえた。ガスの逆流する音だ。少女はずっとガスを我慢している。マウスをクリックして夜に帰る。

「奇麗だね」

「うん……」

ごぼつ。くうううう。

お腹がもう一度音を立てる。彼女が深く僕にもたれてきて、僕の鼻に彼女の後頭部が押し付けられた。少しでも腹圧を緩めようとしている時、彼女がとる姿勢だった。

もうすぐだ。

夜景が目に入らない。自分の腿の上に乗った彼女の小さな尻から意識が離せない。僕は彼女の熱を逃がさないようにそっと両腿をピタッとくっつける。

音はしなかった。不意に腿の内側にわずかに熱を感じ、僕の胸に押し付けられている彼

女の背中が僅かに丸められ、彼女が脱力したのが分かった。僕の腿と彼女のお尻に挟まれた狭い空間にじりじりと熱が広がって、ズボンの中の僕の陰茎の先端を温める。

遅れること数秒、鼻腔に独特な匂いが立ち昇ってくる。焦げくささの混じった、彼女のお腹に溜めたコロコロ便の匂いはオムツに濾過されてもなお強烈だった。

彼女が顔を画面に向けたままだった。僕と彼女は気づかなかった振りをして非現実のデートに戻る。

僕が彼女と出会ったときにはもう病状はかなり進んでいて、彼女はほとんど体臭を失っていた。眠りについた彼女の頭皮をそつと嗅いでも何の匂いもしなかった。

神様に好かれたものは氣に入ったものからとられていく。氣に入ったものを彼女から奪っていくのなら、彼女の匂いも氣に入ったということだろうか。一体どんな匂いがしたのだろう。

ふすつ。

僕にしか聞こえないような小さな音がした。熱が先端に甘く吹きかけられ、匂いが昇ってくる。居心地が悪そうに彼女は小さな尻を動かした。

神様は彼女がどんなにお腹に黒いひび割れた塊や濃いガスを溜めても持ち去りはしなかった。彼女は神様の花嫁になるための美しい体でそのお腹の中にはぎっしりと便とガスを溜め込んでいる。

ぷすううううう。ぷつ。ぶびつ。

音も匂いも次第にはっきりしてき始めている。彼女ももうガス抜きだけですまないことは気づいているはずだ。それでも彼女は黙っていた。僕も決定的な瞬間が来るまでは自分からは言わずに待ち続ける。

ディスプレイの電源が切れた。しばらく、画面が変わらなかったからだろう。手を伸ばしたちょうどそのとき、天使が頭を押し付けて、ぐいっと尻を前に押し出したせいで、ずるっと少女の体が滑った。腿の上にあった尻が膝までずれる。

「危ないっ」

彼女が落ちないように両手を伸ばして、ぐいっと抱き寄せた。

「大丈夫？」

ごぼごぼ。ぐおおお。

手に彼女の腸の振動が伝わって、僕の手の下が彼女の腹をちょうど圧迫していること

人魚館の河童

人魚を見たことはありませんか？　そう下半身が鱗に覆われた魚で上半身は美しい少女の姿をしている、その人魚です。

ぜひご覧になった方がいい。美しさに涙を流さない人はいません。あなたもきっと忘れられなくなるでしょう。

いいえ、人魚は幻想の生き物ではありません。ほんとうにいます。寂しい灰色の海の果てに彼女を見せる水族館があるのです。

嘘ではありません。私はそこで働いていたのですから。名刺もあります。ほら、ここに。

六日前にそこを辞めました。ほんとうに、素晴らしい仕事でした。

急に話しかけてしまっすいません。でもどうも気分が高まってしまって、話さずにはいられなかったのです。

その水族館には人魚のほかに展示しているものではありません。理由は簡単です。その人魚を見た後ではどんなに美しい色合いの熱帯魚も一糸乱れず銀の鱗を翻す魚群もくすんで見えるからです。私たちはその水族館を人魚館、と呼んでいました。

人魚館は海辺にあって、一階の受付、そして地下部分でできています。

地下は吹き抜けになっていて、中央に大きな円柱状の水槽が一つあるのです。高さは十メートル、直径が四メートルの大きな水槽です。

地下三階から見上げるその水槽は近くの海から水を引いていて、絶えずきれいな冷たい海水で満たされています。レバーで水槽を海の流れと切り離すことも、つなげることができるようになっています。

その水槽を囲むように、コンサートホールに置いてあるようなふかふかの質のいい椅子が並べられています。

いいえ、芸を見せることはありません。飛び上がって餌を食べたりも輪をくぐったりそういうことはしません。私たちはただ暗い地下のホールの中で、上からの外の光を浴びてただ浮かんでいる人魚を眺めて、涙を流すのです。

「人魚の肉を食べると不老不死になる」という言い伝えはきつと間違っています。どうしてあんなに美しいものを見て食べるという発想ができません。

実は人魚の姿を見ているだけで、寿命が延びるのです。信じられませんか？ それは彼女を見たことがないからなのです。彼女を一目見ればきつとそんなこともあり得ると

思ってしまう。それほど彼女は美しいのです。

姿ですか。彼女の美しい姿を言葉にするのは難しい。

腿から下と尻の側面は銀の鱗で覆われています。その鱗が水槽の上面から降ってくる光を浴びてうす青く光るのです。身を翻すときに青光りがホール全体に広がります。

上半身は美しい少女そのものです。細く長い金色の髪が水槽を漂い、長く細い腕が伸びている。可愛い無邪気な表情を浮かべ、水槽の中を泳ぐのです。

それから、あばらから尻までの胴体は皮膚が透けていて、はい、文字通り透けているんです。彼女の肌は透けていて、青と赤の血管が彼女の体を巡っているのが分かるのです。ええ、内臓も見えます。グロテスクではありません。彼女は内臓まで透明でただ青と赤、それが美しく渦を巻いたり枝分かれしたりしているのです。

食事ですか？ 魚やオキアミ、海藻も食べます。食べたものは胃のあたりまで見えませんが、誰もそれをグロテスクだなんて思いません。

彼女が口にしたものが嚥下されていく様子を誰もが息を呑みながら見ているのです。細い食道を通っていくときなど、観客はあの管に飲み込まれるなら魚にでもなんでもなろうと思うものです。とにかく美しい姿でした。

どうしてやめたのか。いいえ、不満はありませんでした。同僚も優しく、私にしかできない仕事に誇りもあった。けれど、やめなければいけなかった。

いいえ、なんてことを言うのですか。私ほど人魚館に貢献した者はありません。失礼な人ですね。私が一番彼女の腸を揺らすのが上手だった。一番彼女の腸を熟知していたのは私だった。

余計なことを言いました。口を滑らせました。忘れてください。違う話にしましょう。

いえ、違う。彼女の内臓は美しい。素晴らしい。けれども、彼女の糞便までそうとは限らない。

違います。人魚館は水族館や動物園とは違う。ありのままの姿を見せる場所ではない。人魚は美しくなくてはならない。

どんな美しい人でも排便の姿は美しくならない。放尿は構わない。人魚の尿は透明です。水中を舞いながらそっと放尿しても誰も気づかない。でも排便はダメなのです。

ああ、そうでした。内臓は透けるという話をしましたね。でも、そこはうまくできています。人魚は美しいままでいられるようにできているのです。彼女の腸は彼女の体の外にあります。

伝わりませんよね。分かります。私も最初はこういうことかわからなかった。

観客のいるホールの最前列からさらに一段下がった、観客の目が届かない場所に水槽があるんです。黒い目隠しの裏側、その中に彼女の腸があります。透명한長い芋虫のような姿になって水槽に浮かんでいるのです。細い方が小腸で七メートル。太い方が大腸で五メートルあります。大腸が人間の二倍あるんです。糞便を蓄えられるように。

私以外は触れることもできません。そうです。私は河童の血が混じっていますから。ほら、このように水かきがあるでしょう。

彼女が食事をとると食べ物には胃に運ばれます。それが終わると彼女の胃の下あたりで食べ物には小さな水槽の下に芋虫のような腸に移される。

どうやって？ それを考えることにあまり意味はないでしょう。人魚は美しくなければならぬ。その法に彼女の体が従っているだけです。

私の仕事は、彼女の排便を促すことでした。いつまでも腸に糞便を貯めておくことなどできません。排便しなければならぬ。けれども彼女の排便をする尻は美しいものだから円柱の中の彼女の本体についている。

人魚館は真夜中も開いています。深夜であっても人間は美しいものを見たい。むしろ夜に蝕まれ弱った心にこそ美は届くのです。それに、夜中の彼女の寝顔、それほど人の心に安寧をもたらす寝顔はない。だから、決して夜に人魚館を閉じるという惨いことはできない。

けれども五から七日に一度、夜の二時間だけ人魚館は閉じられる。彼女の排便のためです。二時間でも一週間かけて溜まった便を出す時間と考えると短いでしょう。

私は時間になると目隠しの布をとって水槽に手を入れます。彼女の腸のうち、大腸側を傷つけないように掬い上げます。彼女が痛みを感じることがないように丁寧丁寧に取り出します。

時折真上の円柱の水槽の中の底で眠っている彼女の様子を見ます。彼女が顔をしかめたり、唇を噛みしめたり、痛がる素振りがあつたらすぐに元に戻せるように、慎重に水の上にあげて、バケツの中に大腸の部分だけを入れるのです。

私はそれから大腸の中身を注視します。一週間かけて色のついた塊がどれだけ彼女の腸に溜まっているかを確認します。

人形はその美しい体の維持のために大量の食物を摂ります。一週間経つと腸に溜まっ

た糞便ですつしりと重くなっています。溜まった便とガスがひだがいくつもある大腸の形そのままにぎっちり詰まっています。

私は彼女の腸を注意深く観察して最も体の負担がなく、出せるようにしなければならぬのです。これは長年の勘がいます。

まずは、ガスを出させる必要があります。ガスがたまりすぎていると大腸がパンパンで、腸を揉むことができないからです。気泡がたまりやすい場所があるので、そこを注視しながら透明な芋虫のような彼女の腸を揺らすのです。時には前後、上下に揺らし、ます。気泡がなるべくくつつくようにするのが、コツです。

人魚は腸を揺らさないとガスの排出ができませんから、気泡は大小数えきれないくらいあります。それを的確に揺らしていくのです。彼女の腸の気泡どうしを近づけ、膜を揺らし続けると、やがて気泡がくつつき始めます。彼女の腸もうねり始めます。私に揺らされて腸が動き始めるのです。

私はすぐに中央の人魚のほうを見上げます。眠っていた彼女が目を覚まし、そわそわと落ち着きなく辺りを見まわし始めたなら、ガス抜きがしたくなった証拠です。彼女はいつも放屁を見られたくないために、水槽の上へと向かおうとします。

半馬の散歩係

ロッコちゃんは近所のカフェの半仔馬で、飲み会の席で店長が知り合いからもちょうとを決めたせいで急ごしらえの狭い柵と小さい馬小屋の中に押し込められていた。

半馬がそんな狭いところに押し込められて運動量が足りるわけもなく、散歩係が必要になった。親がカフェにコーヒーを納めていた縁で僕は一日五十円でロッコちゃんの散歩係に任命された。

散歩コースはカフェの裏側にある白樺林だった。小さな林の中に、人通りのほとんどない細い林道が通っていて、僕はロッコちゃんの首に鈴をつけ、彼女を連れて歩いた。

彼女は可愛らしい子だった。

僕が馬小屋の前に姿を表すと、いつも口に入れていた牧草を放り投げて僕の前に小走りでやってきて、柵の上から上体を乗り出して、僕の名前を呼び小さな舌で舐める。髪を撫でると、嬉しそうにびよこびよこ尻尾を振った。

彼女の黒鹿の髪のはいつも艶やかで、濡れていた。彼女を撫でた後の手にはうっすらと泡立っていてシャンプーの匂いがした。半馬の汗にはシャンプーと同じ成分が含まれて

便秘検査

霧立ニウちゃんが僕の前を歩いている。

彼女は僕の前の席の子だ。彼女はそばすが特徴的な大人しい子で、僕はまだ数回しか言葉を交わしていなかった。僕は彼女の好きな食べ物すら知らないけれど、僕と彼女はす向かいで登校する時間もほとんど同じだったからよく前を歩いているのを見かけた。

彼女が靴箱に靴を入れたのに遅れること数秒僕も靴を入れ、彼女に続く。玄関ホールには列ができていた。そうか、今日は便秘検査の日だ、と僕は思った。

「はい、お腹見せてね」

便秘検査機をもった保健の先生が声をかける。列の先頭にいた上級生が体操服をめくつて、お腹を出すと手早く検査機を当てられるたこの検査機は腸内のガスと便に反応して、便秘かどうかを判定できる機械だった。

緑に光ったのを見て「はい、大丈夫だね」と保健の先生は言った。

上級生はお腹をしまうと階段へ向かっていく。検査がある日はみんな分かっているのだからなるべくお家で済ませて来るし、一日や二日出なかつたくらいでは引つかからないから引つかかるほうが少ない。